

# Newsletter

February 2012

<http://www.aack.or.jp>

目次

「ブータン・ミッション」の復活	松林公蔵……………	1
アコンカグア	安田隆彦……………	5
八〇歳からの挑戦	平井一正……………	9
私の京大山岳部	一九六〇年代を中心に (連載・第一回)	11
ACKニュース	吉野熙道……………	11
平井一正氏の日本山岳会名誉会員のこと	芳賀孝郎……………	20
梅棹忠夫・山と探検文学賞	……………	21
松沢哲郎氏の著書に『毎日出版文化賞』	……………	22
図書紹介	……………	22
「新選『ヒマラヤ文献目録』	薬師義美編著	22
「未踏の南極ドームを探る・内陸雪原の13カ月」	上田 豊著	22
「登山案内・一等三角点全国ガイド」	一等三角点研究会編著	23
会員動向	……………	23
編集後記	……………	24

## 「ブータン・ミッション」の復活

松林公蔵

はじめに

二〇〇九年から、ふたたびブータンにかかわるようになった。私にとつてのブータンは、一九八五年秋、堀了平教授を隊長とする京都大学山岳部ブータン・マサコン峰登山隊に参加してから実に二五年ぶりのことである。八五年のマサコン峰登山では、登山隊員の健康に責任をもつ隊付き医師兼登攀隊員としての参加であり、途中のキャラバンで十数名の一般住民の「医療相談」には応じたものの、ブータン住民の健康や疾病全般についてはあまり触れる機会がなかった。一九七九年に初めて行ったカラコルムのキャラバンでは、医師というとキャンブに着くたびに多くの治療希望者に囲まれて息つく暇がなかったものだったが、それから六年後の一九八五年でも、ブータンは伝統的な価値観なのか、あまり「乞う」という文化に接しなかった。

しかし二〇〇九年以降は、老年フィールド医学の臨床研究者としてふたたびブータンを訪れるようになった。その過程で、AAACKとブー

タンとの長い歴史を改めて実感し、先人たちの数多くの人脈と遺産に裨益したこと限りない。  
本稿ではそのゆくたてを記してみたい。

### 地球研「高所プロジェクト」

一九八五年の春のナムナニ、秋のブータン・マサコン峰登山と一年間のヒマラヤ三昧を終えて京都大学老年科・神経内科に戻った私は、教授から「十分山は楽しんだらもう学位研究も終了したのだから、来年からは高知に行つて欲しい」と高知医大老年病科へ赴任を命ぜられた。あ

とから聞くと、同級の数名が高知赴任に難色を示したらしい。  
一年間、ヒマラヤに行かせてもらった恩がある私にとっては否応もなく、八六年四月に助手として高知に赴任した。そして、私と同時に老年病科に研修医として入局してきたのが奥宮清人君である。奥宮は、私の専門である神経内科・老年病学を専攻し、高知県で「フィールド医学」をたちあげ数々の海外医学調査をとにもする後輩となった。二〇〇四年に奥宮は、上賀茂にある総合地球環境学研究所（以下、地球研と略）に准教授のポストを得た。医学部を出て一五年ほど臨床医学を修めた後、教室員もいない学際融合の研究

所に好んでゆく医師は少ない。

そういう意味でも奥宮は私の後継で、やがて「人の生老病死と高所環境―高地文明―における医学生理・生態・文化的適応」というプロジェクトをリーダーとして立ち上げた。進化・生態・文化の異なる「高地」住民の疾病・老化・生活実態に関する実証的な知見を比較することによって、高地環境に対する生物学的な適応と文化的適応の相互連関を考察し、「人の体に刻み込まれた『環境』」という新たな概念を提示する、という壮大なプロジェクトである。

この研究プロジェクトの発足以来、多くのA A C K会員研究者がコアメンバーとして参加している。住民の住む「高所」の対象地域としては、中国青海省、インド・ラダーク、インド・アルナーチャル・プラデッシュが中心であったが、ブータンをぜひともやりたいという若き研究員があらわれた。それが、坂本龍太君である。

坂本は、東北大学医学部の出身で、数年間、東京で救急医療の研修にたずさわったのち、京都大学の公衆衛生学教室に大学院生として入学してきた。いつのまにか、私たちの「フィールド医学ゼミ」に参加するようになり、ニューギニア、タイ・コンケン地域などのフィールド医学調査にも参加した。大学院を卒業してからは、医師としては薄給の地球研の研究員を志望し、奥宮の右腕として青海省、ラダーク、アルナーチャルなどの高所フィールド医学研究に従事した。その坂本が、「実はブータンは子どもの時代からの憧れの

国であり、もしも医師として現地に長期滞在する高地とすれば、ぜひブータンに行きたい」と希望してきた。二〇〇八年の夏、青海省調査のころと記憶している。

この坂本の切望が、私を二五年ぶりにふたたびブータンにかかわらせる契機となった。

### 栗田・坂本の対ブータン折衝

ひとりの若手医師が希望したからといって、責任をもって医師を長期にわたってブータンに送り込み診療を実践する交渉はさほど簡単ではない。私は、マサコン隊の副隊長でありブータンに太い人脈をもつ栗田ラーメン氏に相談した。将来のブータン未踏峰の登山をめざして一時期ブータンにかかわったA A C Kの先達は多いが、一生ブータンにかかわったA A C K会員は栗田ラーメンさんをおいて他にいない。

栗田ラーメンさんは、若き坂本医師の希望を諒とし、ひとはだもふたはだもぬいでくださった。二〇〇八年一月に来日したLyombo Dago Tsering (当時ブータン王国駐インド大使) に坂本を紹介してくださった。

二〇〇九年五月には栗田氏に連れられて、坂本奥宮松林がブータン保健省を訪れた。東のブムタンまで行き、途中の診療所や病院の見学もさせてもらった。帰国前に、再度、保健省の局長に坂本の希望を伝えて帰国した。

これで「いよいよブータンに行けるのだ」と希望を新たにした坂本は、スケジュールや今後の抱負を何度もブータン保健省局長にメールしたが、ブータン保健省からの返答は

いっこうに得られなかった。二〇〇九年八月、栗田・坂本連名でティンレー首相に書簡を送り、八月三十一日には来日した首相に栗田・坂本で会見することによって、事態は少し動き出した。一月には、坂本単身でブータンに赴き折衝、その後、何度もメールのやりとりが行われる。坂本のブータンへの赴任が正式に採択されるのは、「GNH委員会」という諮問機関の議決を経た二〇一〇年七月二日のことである。ブータン郡部地域で外国人が高齢者診療を行う、それも日本の研究機関が組織的に行うような性格のプロジェクトは、個人の外国人医師ボランティアとは異なり、ブータンでは、「GNH委員会」の承認を経るべきで、閣議にかかるという。

交渉開始から一年以上の歳月を要した。六九年隊の吉野コツペ氏が、ブータン入国を求めて三ヶ月インドに停滞したことを思い出す。

地球研と保健省との「交流協定」を一月に締結する省議が決定し、坂本は二〇一〇年九月一五日から、事前準備のためカリンに赴任していった。

### 京大・ブータン友好プログラム (KU-Bhutan) の胎動

上記のような二〇〇八年一月から二〇一〇年七月にわたる地球研とブータン保健省との協議と併行して、京大内部に別の動きが醸成されていた。

二〇一〇年三月頃、京大研究所長会議で「京都大学が一国を対象に行うミッション」について議論が行われたらしく、席上、霊長類研

究所長の松沢ニーナが「ブータン」をその候補としてあげたことに始まる。一九九〇年のAACKシヤパンマ医学研究登山の後も、松沢は教育学部と協働してブータンにかかわっていたので思い入れもあつたのだろう。たまたま、「赤垣」で奥宮ともども今後のブータン計画の概要を協議している席に、研究所長会議の松沢から「京大ブータン・ミッシェン」の件で電話がはいってきた。その偶然にはとても驚いた。当時、「ブータン医療計画」のことは松沢も知らないし、「京大ミッシェン」のことは私も知らなかった。「別床同夢」といった感じである。この松沢案は、京都大学の正式案件「京都大学・ブータン友好プログラム (KU-Bhutan)」として採択さ



写真1 1957年晩秋、京都を訪れたブータン王妃一行（前列右：ケサン・ワンチュク王妃、中央：王妃母、左：王妃姉、後列皇后、後列右から2人目：故・桑原武夫教授）

れ、二〇一〇年度より全学経費が措置されることになる。KU-Bhutanは、京都大学研究所・研究科群がそれぞれの専門的な立場から参加する全学的なとりくみであり、松沢が世話役となっている。二〇一〇年には、KU-Bhutanから一次、四次の訪問団が、二〇一一年にも五、九次の隊がブータンに派遣された (<http://www.jp.kubhutan.org/>)。

地球研高齢者医療ルートとKU-Bhutanが、独立にブータンで交わったことになる。そして、その系譜の源流は、一九五七年に始まるAACKとブータンとの長い歴史にさかのぼる。

### AACKとブータンの歴史

一九五七年晩秋、時の第三代ブータン国王王妃ケサン・チョデン・ワンチュク皇后が非公式に来日されるという情報が本多勝一・朝日新聞記者からAACK事務局にもたらされた。故・桑原武夫教授らは、将来のブータン未踏峰登山の可能性を視野に入れて、芦田譲治教授たちとともにただちに行動をおこした。王妃とその母・姉のブータン皇室一行に対して懇切な接遇と京都の街を案内したが、京都大学とブータン王国の最初の出逢いである（写真1）。このえにしがきつかけとなり、一九五八年には中尾佐助が、日本人としては初めてブータンに入国を果たし、「秘境ブータン」として結実した。中尾は高弟の西岡京治氏をブータンに送り、西岡はその後、ブータンに滞在すること二四年にわたってブータンの農業発展に尽力し、ダシヨールの

尊号を受けたことはよく知られている。

その中尾以来、ブータンには、一九六九年の桑原武夫・松尾稔の調査隊が、そして、八五年に京都大学マサコン峰初登頂が実現した。ブータンには、その後も京都大学から連綿と学術調査隊が出ているが、近年は、横の繋がりが希薄で、縦糸となる歴史的経緯についても忘却されているくらいがあった。京都大学・ブータン友好プログラムは、国の大小を超えてイコールパートナーとしての日本とブータン、それをつなぐ架け橋としての京都大学を意識して企画されたが、その源流はAACKとブータンとの関係に求めることができる。

### 地球研「高齢医学プロジェクト」と京大・ブータン友好プログラムとの邂逅

二〇一〇年一月一九日、立本成文・地球研所長とLyongo Zangley Dukpa・ブータン保健大臣が正式の交流協定を保健省で調印した。一方、同日、第一次京大・ブータン友好プログラム訪問団一行はJisne Sinpre Wangchuck第四代国王に謁見した。その際に、第四代国王から、「京都大学とブータンとの古くからの友好関係はよく承知している。ついては、京都大学隊が撮影した古い写真を提供していただけないであろうか。往時と近時のブータンの生息と生活ぶりをその写真によって比較検討してみたい。」との所望を受けた。

坂本、奥宮と私は、両訪問団が帰国ののち、坂本が長期滞在する東ブータンのカリンに赴き、ブータンで初めての地域高齢者健診を開始

した。奥宮と私の帰国後も、坂本は半年間カリンに滞在して、地域住民の信頼を勝ち得た。

二〇一一年八月四日から一三日まで、保健省局長とタシガン県知事一行が地球研「奥宮高所プロ」の招きで来日し、京都でシンポジウムをもつた後、私たち老年医学グループがフィールドとして、高知県土佐町を訪れた。健診終了後の、土佐町幹部、土佐町老人クラブ、京都大学医学研究科院生、東京女子医科大学による合同懇親会が行われた。宴たけなわとなつて老人クラブによる伝統踊りが披露され、地域老人のハーモニカ演奏、ケサン・カリンBHU所長の絶唱も喝采を受けた。

最後には、全員が高知県の鳴子を手に持つてよさこい踊りの行進に参加した。記念写真撮影時に、Dasio Limgsten Doji: タシガン県知事がブータン一行を代表して謝辞を述べ、「感激の極みである。とくに、一八歳の学生から九〇歳の老人まで、官・民・学が協働して実施する高齢者健診の中に、高齢者を尊敬する気持ち、また老人も若者に伝統を伝えたいという情熱が切々として感じ取られ、本プログラムは、GNHを標榜するブータンの精神と完全に一致する。ブータンは、本健診プログラムの方法を深く学びとり、また、今後の相互の交流を通じて、ブータン高齢者に還元したいと願っている」と語った。土佐町の地酒「桂月」の酔いも手伝つてか、知事の瞳は濡れていたようにさえみえる。

すべての挨拶・会話は、坂本医師のすばらしい同時通訳によって、ブータンと土佐町住民の心が一致した一夕であった。

おわりに

二〇一一年一〇月一五日、京大の一行は、ティンプーにおける現国王の結婚式に招待された。その一行は、松林、竹田、榊原というAACK会員にくわえて、「賓客」として故・桑原武夫教授のご子息文吉氏が同行され、結婚式の当日、六九年隊の写真をもとに作成した「写真集」を、第三代王妃に桑原文吉氏の手ずから献上することができた(写真2)。

翌月一二月七・九日にかけてモンガルで行われた全国保健省会議に招待された坂本、奥宮、小林、松林は、坂本の高齢者ヘルスケア・ミッションが、ブータン保健省の第一次国家五カ年計画として採択されたことを確認し、保健省から今後、ブータン全土に普及させるための協力を依頼された。地球研の奥宮「高所プロジェクト」は、二〇一二年度を最後に多大な成果を得て終了するが、ブータン・ミッションは、京都大学が継承して続行する。

付記) 二〇一一年九月二〇日、再度のカリン滞在を終えた坂本が、帰途偶然に、笹谷寺本、安岡、栗田氏などから構成されるAACKブータン旅行団とウオンデユボダンで遭遇して、病気になるれた野村ズッパ氏を適切に診断し、ティンプー病院に搬送、以後九月三〇日まで懸命な看病にあたった。野村氏はティンプーからバンコク、バンコクから東京へと特別救急機で搬送され、いったん東京通信病院に入院後、一二月一九日にほぼ完治にて退院された。この救出過程における笹谷



写真2 故・桑原武夫教授ご子息・文吉氏から「京大69年隊の写真集」を手渡されるケサン・チョデン・ワンチュク皇太后。

べ、栗田ラーメン他AACK会員各氏の連携、東京での受入れ後の野村夫人のケアに献身された島田ケロ、神山義明、田中ケンボウの各氏によるチームワークには、AACKゲマインシャツの原点をみた思いであった。

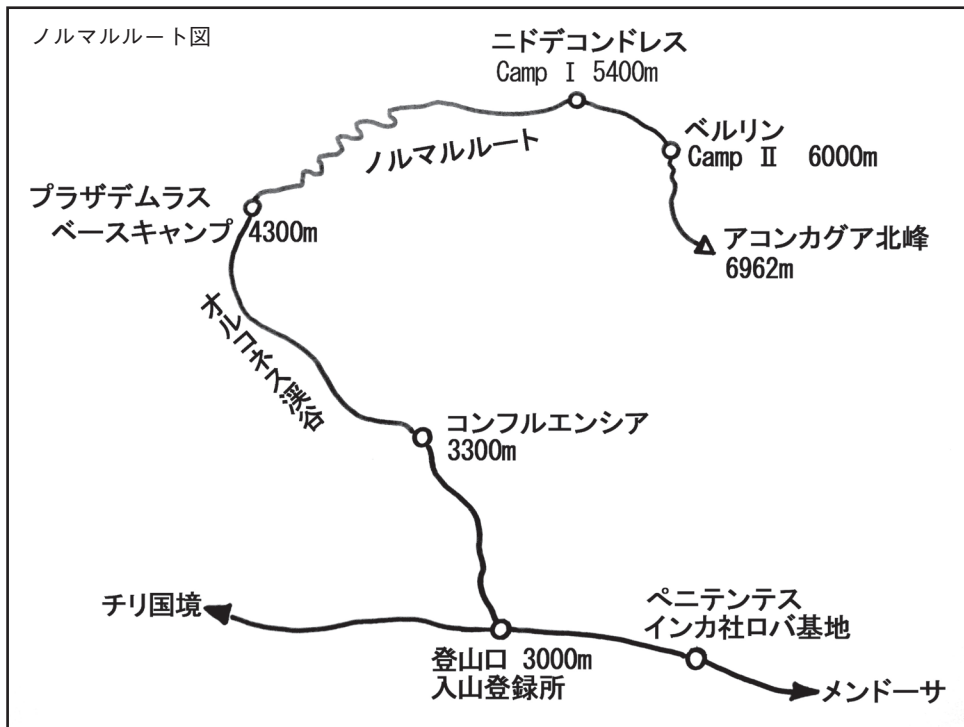
なお、バンコクでは、小澤ポインタ氏ご子息のタイ住友商事・小澤純史氏に、野村氏救出・搬送に献身的な努力をいただいた。記して深甚の感謝を申し上げます。

また、坂本龍太君は、京大の優れた研究者を激甚の倍率を経て選考する「白眉」助教として、二四年四月より、京大東南アジア研究所に移籍することも併せてご報告するとともに、坂本君の献身的ご努力に深謝する次第です。

# アコンカグア

安田隆彦

六千米級を歩いた次は七千米級を歩こうと



対象の山を模索し、アコンカグアの国際隊に二〇一一年二月に加わって挑戦しようと段取りしていた。そんな折、入山者の少ない二月に一緒に行かないかと安仁屋(六三年入部、六六歳)に誘われ、願ってもないことと参加した。隊員は安仁屋の所属するスキークラブ

ラ・ランドネのメンバー田原健司(六五歳)村上静志(六一歳)を加えて四名。同山は地球の反対側にあるので時差が大きく、その対策が高度順応と共に大切な要素となる。二つの問題を同時に解決するため事前にクスコからチチカカ湖沿いに一週間ほど滞在し三五〇〇m〜四〇〇〇mあたりに体を慣らすこととした。

二〇一〇年十一月二二日(月)

〜三〇日(火)

成田発↓リマ↓クスコ↓マチュピチュ↓クスコ↓プーノ↓チチカカ湖畔↓ラパス

一二月一日(水)

ラパス午前四時一五分発 チリ・サンチャゴ経由 登山基地の町アルゼンチン・メンドーサ一四時五五分着 機中より真白なアコンカグアの全貌を見ることが出来た。メンドーサはワイソンの町としても有名で、町に近

づくくとブドウ畑の緑の絨毯の上を飛ぶ。

一二月二日(木)

今回バスの終点からベースキャンプまでの資材輸送を頼んだ登山斡旋会社インカ・エクスペディション (inka@inka.com.ar) を訪問。ロバの費用(一頭六〇kgの荷物、片道\$20三頭分と安田、田原はベースキャンプからキャンプI、IIへのポーター利用費用(二〇kgの荷物 BC↓CI…\$150、CI↓CII…\$200)を支払う。

その後登山許可を取りにアコンカグア公園事務所を訪問。メンドーサ市内中心部の立派な建物に入っている。入山費用は昨年より六割もアップして下記費用になっている。

繁忙期 一二月一五日〜一月三一日

3,000ペソ⇨六・六万円

中間期 一二月一日〜一四日、二月一日〜二〇日

2,200ペソ⇨四・八万円

閑散期 一二月一五日〜三〇日、三月一日

〜三一日

1,200ペソ⇨二・六万円

一二月三日(金)

現地調達食料品、料理器材の購入。大型ショッピングセンターにてほとんどのものが一度に揃う。ただしひとパックごとの分量が大きく、使いにくさは致し方ない。

一二月四日(土)

七時発プエンテ・デル・インカ行きのバス

に乗車。荷物は一人一個で一個一五kgという規定があるのを始めて知る。終点手前のペニテンテスにインカ社のロバ基地がある。そこですべての荷物を計量し、ロバに積めるように梱包の弱いものは堅牢なプラスチックボックスに入れなおす。

登山口のオルコネスにある入山登録事務所にて番号付のごみの袋を渡され、それにゴミを入れて返却しないと罰金が\$200掛かる。番号は入山許可証の番号で、今シーズン私が三三九人目の登山者となる。

一四時歩行開始、高度三〇〇〇m。早速オルコネス湖のうえにアコンカグア南壁の全貌が見える。我々のルートは北西のノルマルルートといわれる所。ゆるい坂道を登り最初の宿泊地コンフルエンシア着一七時。同所にある公園事務所で登録を済ませると若い美人Dr.の健康チェックを受けねばならない。問診、血圧、SpO<sub>2</sub>、心音検査がなされる。SpO<sub>2</sub>が八五以下だと下山命令が出される。高山病予防対策のため数年前からAsociacion Andina de Medicos para la Altura (aampa.org) が行っている活動。ドクターを二四時間コンフルエンシアとベースキャンプ地のプラザデムラス（最盛期にはCamp Iのニドデコンドレスにも）配置して、すべての登山者をチェックし、健康状況のよくない者は下山させている。

登山許可証の下段に二箇所、ドクターチェックの証明欄が設けられているが、そこに承認のサインを受けなければならない。

一二月五日（日）  
五時四〇分起床  
七時四五分 コンフルエンシア 三三二〇〇m 発

一二時五〇分 イバネス 三七七〇m 途中のキャンプ場ここからゆるい登りが始まる。

一五時三六分 廃屋 最後の急坂手前

一七時三〇分 プラザデムラス ベースキャンプ地 四三〇〇m 九時間四五分の歩き

ベースキャンプまでの長い歩き。オルコネス渓谷沿いの広い川原を歩く。正面に見える城壁のようなカテドラル山（五二五四m）を指し、兩岸の奇岩の山々を楽しみながら歩く。

キャンプ入り口の公園事務所で入山登録を済ませる。これより上部での大便是番号付のプラスチック袋に入れて事務所まで持ち帰るよう指示される。違反者は\$500の罰金。ここではドクターチェックは到着翌日に来るよう言われる。

一二月六日（月）晴れ

七時 起床

八時二〇分 ドクターチェック

一〇時四五分 高度順応のため上部を目指して出発

一六時三五分 五一七〇mにて折り返し

一八時 ベースキャンプ帰着

ドクターチェックはコンフルエンシアと同じ項目。全員無事承認されサインをもらう。朝食後いよいよアコンカグアを登り始める。足の遅い私は一人マイペースで歩く。一八時にベースキャンプに帰れるよう折り返し点を



夕日のアコンカグア西壁

決める。登り八〇〇mを六時間で歩き、時間一三〇mの登攀スピード。アタック日の六〇〇mから上は、時間一〇〇mの予定で一〇時間登り、下り五時間で計画しているので高度順応調整は出来ている。インカ道の対策が功を奏したようだ。

一二月七日（火）晴れ

全休日 荷物整理をする。太陽が少しでもかげると非常に寒い。

一月一五日以降の今シーズンになり登頂成功者は今の所一名だけとのこと。

昨日と本日の弱風日を利用して登頂者が多量出た模様。しかし凍傷でやられた人も出て、昨日は三人指の凍傷でヘリコプター搬出され

た。基地内にはインカ社のインターネット用テントがあり三〇分一〇ドル、一時間一五ドルで利用できる。気象状況を見るパソコンは別にあり、こちらは無料。

トイレは多数設置され、落とし込みだがドラム缶に落とすようになっていて。満杯になると上屋を倒し、ドラム缶を取り出してヘリコプターで下まで搬出してある。まさに空飛ぶ肥溜。一〇年ほど前から実行されている。おかげで基地内は不快なものが散乱せず安心して周りを歩ける。

### 一二月八日(水) 晴れ

六時三〇分 ポーターに荷物預け

七時一五分 基地出発

一五時三〇分 ニドデコンドレス 五四〇〇m

高度順応で歩いた一昨日の地点より上はだんだん雪面が多くなってきたがステップが出てくるのでアイゼンは不要。テント地に着くとかなりの強風でテント張りが困難であった。急に力を込めてテント張り作業をしたので テント内に落ち着くと軽い高山病症状が出たが、幸い一時間もすると正常に戻った。テントは二張りにして二人ずつ入る。

### 一晚中強風。

過去高山登攀実績で三五〇〇m以上になると高山病のひとつの症状 下痢が始まるのが私の問題点であった。下痢対策に菓を五段階にわけ、下痢が始まってから飲むのではなく、高度に応じて計画的に事前に飲むようにした。三五〇〇mから最初の弱い菓の服用を始め、五四〇〇mでは三段階目の強い菓まで

服用して対処した。お陰で今回は一度も下痢することなく、いざという時のために持参した大人のオシメや余分なパンツが無駄になったことは幸いだった。

### 一二月九日(木) 晴れ 強風

一〇時四〇分 ニドデコンドレス発

一三時三〇分 ベースキャンプ帰着

本来ベルリン(六〇〇〇m)まで高度順応してから基地に戻る予定であったが強風で安仁屋、田原宿泊のアライテントが変形し、そのまま残しておいたら吹き飛ばされる危険性があったので撤収。まっすぐベースキャンプまで降りる。強風の中の撤収は大変。

基地に戻り、テント内でお茶を飲んでいると安仁屋の指が凍傷にかかっていることが判明。テント撤収のとき、ほんの短時間薄手の手袋だけで作業せざるをえない羽目になったのが原因。ドクターに見せに行ったら温湯治療をしてくれ、血液循環促進剤をもらう。残念なことに下山するよう勧告される。ヘリコプターでの下山も可能で、無料なので乗ることにする。残された三人での登山計画に変更を余儀なくされ、大きな痛手となる。

### 一二月一〇日(金) 晴れ

六時三〇分起床

八時にドクターが安仁屋を迎えに来るはずであったが強風のためヘリが飛ばないので待機。アコンカグア頂部には噂のビエントブランコ(山頂にできる傘雲で、悪天候時に現れ)がきれいに見える。その傘雲の動きは早

く、千変万化する。午後になっても風は収まらず、安仁屋搬出は明日になりそう。

### 一二月一日(土) 晴れ

今日は今までで一番の強風が吹き、寒さもきつい。安仁屋はヘリに乗ることをあきらめ、九時四〇分、歩いて下山開始。

明日からの気象予報を確認すると、登頂予定日の一四日は好天予想、風速一〇km/hr、気温マイナス八度で絶好のアタック日和。日本で山岳気象予報は当たらないことも多いので、ましてアルゼンチンでは当てにならないだろうとたかをくくっていた。しかし今日までの短い経験できわめて正確に予報が当たっていることに気付く。

アコンカグア気象情報サイト…

(<http://www.snow-forecast.com/resorts/Aconcagua/day/bot>)

ほとんど連日晴ればかりだが、行動できるかどうかは風が強くなって歩けるかどうかに掛かっている。その大切な風速予報がきわめて正確になされていると思われた。

### 一二月二日(日) 晴れ

昨晚より風が一段と強くなり、夜半にはテントのフライが裂けた。フライがないので非常に明るい朝となる。ポールも変形している。テントをたたみインカ社の八人用テントに泊まることとする(一人一泊<sup>2</sup>)。同宿になったスペイン人四人組は六日間ニドデコンドレスで登頂をうかがっていたがあきらめて降りてきた。彼らの話に寄ると、我々の置いてき

たテントはポールが折れてテントは破けているとのこと。話が本当なら一大事。早朝に一段と強くなった風は気象予報どおり、うそのように一〇時過ぎ頃から収まり始め、午後には無風状況になる。

インカ社のポーターがテントの実情を調査してくれての報告。フライの一部破損、ポールの一部が破損又は曲がっている。これにより撤収やむなしとなる。

ベースキャンプに使用したダンロップの六、七人用、前進キャンプに使用したダンロップ三、四人用、アライ三、四人用の三張りとも破損を受けたことになる。

ダンロップ製は二張りとも二〇年前購入のテント。購入直後はパタゴニアにおいて小石が飛び、地面に這い蹲らないと前進できないような烈風にも耐え抜いた優秀なテントであった。しかし年とともに強度が落ちていたのだろう。経年劣化に関してはスキー靴やビンディングのことは話題にしたにもかかわらず、テントにも適合することに思いのいたらなかったことが今回敗退の一要因だったと思われる。アライテントは新しいものだが、アコンカグアの気象に耐えられる物ではなかったようだ。

ヘリコプターが飛び始める。真つ先に運んだのが肥溜め。

一二月一三日(月) 晴れ

ポーターにニドデコンドレスのテント内にある荷物の撤収を依頼。残った食料の中から美味しいものだけ食べる贅沢な夕食。

一二月一四日(火) 晴れ  
六時起床

八時 ロバ用の下山荷物を計量、一一一kgとなり、二頭(限度一二〇kg)で収まる。  
八時三〇分 基地より歩き始め。

一五時〇五分 コンフルエンシア着  
一七時三〇分 オルコネス 登山口着

下りは長大な坂道、視界は広く圧迫感なくゆつたりと歩ける。振り返るとこの時期は、ほぼ一週間周期で弱風の日がめぐってくる。多くの隊がニドデコンドレスで何日も弱風の日を待ちながら待機して、チャンスが来ればアタック態勢に入るようだ。

登山口ではインカ社の車が待機しており、ロバに預けた荷物を引き取り、夕刻八時のバスに乗ってメンドーサに帰着する。

一二月一五日(水) 晴れ

メンドーサは三五度前後なのだが乾燥しているので半そで半ズボンで快適な気候。山の上での寒さが嘘の様な大きな変化。強風の影響であらゆる登山道具、衣服が埃だらけ。

一日かけてタオルで拭い、埃を落とす。安仁屋の凍傷は時間の経過とともに次第によくなっており安心する。期日指定の安い飛行機切符なので待つこと四日間、大木のポプラ並木の木陰に張り出した野外レストランで、おいしい肉とワイン、サラダ(合わせても千二、三百円と安い)を楽しみながら道行く美人を愛でる。

一二月一九日(日) 晴れ

メンドーサ一六時四〇分発 サンチャゴ、ダラス経由 成田 二一日 一四時三五分着

投稿後記(二〇一一年一月一〇日)

五年前退職し、会社、家族に対しての大きな責任がなくなつてから山を再開した。

東京近郊の山を一年歩いて足慣らししたあと、初めての海外登山として二〇〇八年七月、キリマンジェロの山頂に立つことが出来た。以降二〇〇九年八月、チュルウエスト(六四二五m)、二〇一〇年一月、メラピーク(六四五六m)、そして今回のアコンカグア(六九六二m)と三峰を目指したがいづれも山頂には立てなかった。しかし五四〇〇、六二〇〇mの高さを経験すると共に、そこにいたるトレッキング、近郊の観光地をエンジョイした。もともと腸が弱かったせい、最初のキリマンジェロの時から高度に対して異常反応を示していた。試行錯誤の結果アコンカグアでは下痢対策を薬で押さえ込むことに成功したので、それならと、二〇一一年八月、キルギスタンのレーニン峰(七一三四m)に挑戦した。事前の高所トレーニングとしての富士山を二〇一一年五月と六月に実行した。六月のとき過去六回の富士山で一度も経験しなかった高度障害による腹痛と頭痛を感じた。その時の体調は万全だったので不具合の原因が理解できなかつた。レーニン峰のBCは三六〇〇mの高度だが、四日間いても馴染むことが出来ず一旦下山した。高度を下げたとたん体調は回復したので再度五八〇〇



mまで登ってきた。これらの状況から加齢による高度適応能力の低下を実感すると共に、薬による下痢対策の限界を感じた。しかし同時に高度を上げ下げすることにより高度障害克服の可能性が大きいと感ずるようになった。

## 八〇歳からの挑戦

平井一正

### 一、高齢者登山

私はAACKの創設された一九三一年に生まれた。したがって会と私の年齢は同じであり、今年で満八〇歳になる。思えば二六歳のときにチヨゴリザ（七五四m）初登頂に成功して以来、内外の多くの山に登った。以後隊員、隊長など様々な立場で、三〇歳のときのサルトロカンリ（七七四二m）、四四歳のときのシェルピカンリ（七三八〇m）、五四歳のときのクーラカンリ（七五四m）と初登頂を重ね、七二歳のときのルオニイ峰（六八五〇m）は失敗したものの、いずれも無事故が嬉しい。

往年は体力気力充実して、年齢を感じさせない登山を行ってきたが、八〇の声をきくと気力体力の衰えは如何ともしがたく、往年のような登山はむづかしくなっている。とくに高齢になると、感覚、判断、動作に少しづつ誤差を生じ、それを総合判断する脳の衰えもあって、ちょっとしたところで転倒や、パランスの悪さなどで怪我をするおそれがある。

た。今回は六千メートル級の山の中で、最終アタック前に、登ったり降ったりの繰り返しを最もしやすそうな山を探して再度高い山を楽しんでみたい。

怪我以外にも水分不足や高血圧などに起因する脳梗塞や心臓病など、病気になる場合もあり、一般に高齢者の登山は慎重にしないとけない。特に山中何泊もする場合は、山小屋の環境により十分な眠りがとれず、体調維持がむづかしい。

### 二、転倒事故の例

転倒事故だけでも、二〇一一年夏だけで次のような事故が起こったと報告されている（JAC山、二〇一一年九月）

太郎平から折立へ下山中、木の枝につまずいて転倒、膝を骨折（七一歳女性）、五色原から黒部湖への途中、岩に足を挟んで足首骨折（六二歳女性）、薬師沢付近の登山道で転倒、足首骨折（四一歳男性）、水晶小屋への東沢乗越で石につまずき転倒（六二歳男性）、太郎平から高天原山荘への途中、金網に石をつめた籠に足を引っかけて転倒（六四歳男性）、等々である。これとは別に、鷲羽岳の下りで足をすべらせて手首骨折（五〇歳？女性）と言う話もきいた。男性、女性を問わず転倒して骨折するケースが目立つが、体力低下による踏ん張りがきかないということもあるであろう。奥深い山中で骨折した

ら、同行者はもとより多くの人に迷惑をかけるし、単独であれば遭難ものである。十分に注意したい。

### 三、赤牛岳登山

二〇一一年夏、八〇歳になるのを記念に赤牛岳（二八六四m）に登ってきた、この山は北アルプスの最奥に位置し、普通の人なら山中最低一泊はしないと頂上は踏めない。昔から横目でみていた山である。

実は昨年は南アルプス塩見岳（三〇四八m）に登って、ひさしく味わっていなかった爽快感を得て、今年もということになったのである。昨年は山中一泊二日であったが、今年山中三泊四日の山行きであった。塩見岳の場合は神戸大の井上が、今回は同井上、緒方、山田が同行してくれることになり、心強い限りであった。いずれも私が隊長であった登山隊のメンバーであり、若いといっても六〇歳をこえている。高齢であること、それに起因する事故など充分注意して、トレーニングも行ってきた。（付記：昨年は塩見岳の他、立山も登った）

### 四、時間記録

#### 八月二六日（雨のち晴）

前夜車で来て、仮眠し、六時に有峰のゲートが開くのを待った。車は折立にデポ。太郎平までは雨が降ったが、ここからは天気はよくなってきた。ここを最後に登ったのは一四年前で、ひとり雲の平から双六、笠と歩いたことが思い出される。



水晶岳から赤牛岳へ（平井（右）と緒方）

折立出発六・五三、太郎平小屋一・五九一  
一二・四四、薬師沢小屋一五・四七

### 八月二七日（晴）

雲の平から見る水晶岳は、気の遠くなるほどの距離と高さがあり、到達できるかという不安があった。でも一步一步苦しさに耐えて登る。祖父岳から見る源流の山はいずれも大きく、圧倒される。水晶小屋はほぼ満員であった。

薬師沢小屋出発六・三五、雲ノ平一〇・一二、祖父岳一二・四〇、水晶小屋一四・三一

### 八月二八日（晴）

朝はガスが深かったが、絶好の晴天に恵ま

れ、入山三日目にして目的の赤牛岳頂上に立った。ここでひとり黒部五郎岳を経て折立におりる山田と別れる。赤牛岳頂上から黒部へおりの読売新道は距離も長く、一〇〇〇m以上の高度差に加えて、岩場、ガレ場、ヌルヌル石など神経を使う場所が多く、また高齢のためかバランスが悪くなっている、かなり疲れた。登りはそうでもないが、下りになると俄然スピードが落ちる。一步一步に気を使う。奥黒部ヒュッテでは風呂に入れてくれた。水晶小屋出発五・四一、水晶岳（二九八六m）六・二八、赤牛岳一〇・二五―一〇・五〇、奥黒部ヒュッテ一六・二五

### 八月二九日（晴）

六〇年前に来た東沢の面影はなく、平の吊り橋も水面下である。すべては変わった。黒部湖に沿う道は、急なハシゴのアップダウンの連続で、感傷にひたる余裕もなく、しんどいの一語に尽きる。日差しも暑く、昨日の下りのための筋肉痛も加わる。行程中一番疲れた感じである。美女平経由で立山駅に連絡する最終ケーブルに間に合わせるべく、最後の力をふりしぼり、四時発の連絡最終便にぎりぎり間に合った。立山駅では折立で車をピックアップした山田が待っていた。捻挫も怪我也も病気もなく無事下山できたことを神に感謝した。

奥黒部ヒュッテ出発六・四二、平の渡場九・〇五―一〇・二五、黒部ダム（ケーブル乗り場）一五・四〇、最終連絡のケーブルカー一六・〇〇、立山駅着一八・〇〇

## 五、総括

毎日平均一〇時間は歩き、アップダウンもはげしく、荷物は個装六kgほどで大したことはなかったが、今にして思えばかなり過酷な山行であった。特に転倒をおそれて足元に神経を使った。また、大きな石のガレ場で石をポンポンと飛ばす所では、二本杖も役にたたず、バランスをくずすおそれ、飛ばないということもあった。一般に登りはさほどでもないが、下りは極度に疲れた。同行してくれたサポーターメンパーのおかげで気力が続いた。次回はもっと簡単に行ける山にして、気体力のあるかぎり山に登りたい。同行してくれた三人に感謝する。

なお会員の中には、舟橋明賢さん（八七歳）や斎藤惇生さん（八二歳）など、八〇歳をこえても矍鑠と登山をされておられる人も多く、これからも励みにしていきたいと思っている。

（筆者は一九三二年一〇月三十一日生、参考までに既往症は労作性狭心症（七八年）、心臓大動脈弁不全（九二年）、堆間板軟骨ヘルニア（九二年）、憩室炎（九〇〜）などがあるが、現在は高血圧症が主な持病である。決して頑丈とはいえない体であるが、なんとか持ちこたえて山に登っている）

## 私の京大山岳部

### 一九六〇年代を中心に

#### (連載・第一回)

吉野熙道

一九六〇年代  
なぜ今更こんな古い記録や思い出を？

遺憾ながら、私は度重なる転居や中国への移住・帰国などもあり、そのたびに保存していた山や研究関係の資料や書籍、実験データまでも処分してしまい、現在はごく一部のフィールド・ノートと写真やスライドとわずかな地図を手元に残すのみである。そのような状態でありながら、私が一九六九～一九七〇年のブータン訪問、一九七三年のヤルン・カン遠征の際に描いた稚拙なスケッチに続けて、剱沢大滝についても、AACCK Homepage に投稿しておこうと思っただけは、たまたま AACCK から「現ブータン国王から、京大のブータン訪問時の資料とくに写真があれば提供してほしい、との依頼があったので協力してもらいたい」という旨の連絡があったのがきっかけであった。

しかしまとめておいたブータン関係のノートやメモもばらばらになっていたし、とくにスライドは、久しい以前から保存・管理が行き届かずにカビが生えたりすれたりしていた。大変気になってきた。しかし手入れをする余裕もないままに放置してきたのだ。それ

らの「残骸」とでもいつてよい資料を見ながら、「こんなものでも発表しておけば何か役に立つかもしれない。しかもその当時は、他の人たちに散々お世話になり、自分でもそれなりに努力しながら実現できたことばかりなのだ」という思いが強くなった。

最近とくに NHK BS アーカイブなどで、かつての記録が刷新されて公開されている。もちろんそれ自体はすばらしいことである。しかしそれらの多くは、ごく一部の総まとめといてよい記録が、しかもマスコミ側の主観だけによつて編集・発表されているのがほとんどである。このような風潮は看過できない。その陰で埋もれてしまう、いわば「前史」ともいべき多くの記録も、せめてもう一度は現在のより改良された技術を用いて公表されるべきであろうと思う。

京都大学学士山岳会 (The Academic Alpine Club of Kyoto、略称 AACCK) は、今西錦司・桑原武夫・西堀栄三郎氏たちの京都一中、三高から京大へと続いた登山・探検活動の延長線上に、木原均教授・郡場寛教授たちの支持と生物誌研究会 (FJG) との協力関係も経て創設された。隊員による学術調査を必ず伴う、その積極的で広範かつユニークな登山・探検活動は世界的に高く評価されてきた。

しかし残念ながら、AACCK の積極的活動は、一九七三年のヤルン・カン初登頂とその直後の遭難、および一九九一年の梅里雪山の全員遭難を最後として幕をおろした。それは、魅力的な未踏峰の消滅、ヒマラヤをも含めた

登山のレジャー化、若者たちの行動目標の拡大・拡散化むしろ消失など、さまざまな社会事象・環境変化などに伴った、予想されていた結果であった。もちろん会員の間ではずいぶん前から「AACCK はどこに行くのか？」という議論はなされていたが、はつきり言うてそれらは結局「悪あがき」にすぎず、少なくとも登山探検活動は時代の流れの中に埋没せざるを得なかった。

AACCK の蔵書や公表された記録は「登山探検文献センター」に収められ、やがて京大図書館に寄贈されたということは聞いていた。しかし問題なのは、その間に多くの原資料や根気よく続けられていた活動の記録などはいったいどうなったのがよくわからないことである。おそらく一部の責任のある立場にあった人は、経過と現状を把握しているだろうとは思いますが、私などのようにここ数十年間も京都や登山から離れていて事情に疎い者には、どうなんだろう？とわからないことだらけである。つい先日から酒井敏明 (オシメ) さんたちの発案により、「AACCK アーカイブ」を整理しようとの活動が始まったところを見ると、漠然とした不安というか落ち着きの悪さを感じていた者は私だけではなかったのかなと思つた。AACCK ばかりでなく、かつてはその母体の一部であった山岳部の活動も長らく低迷していて、部員数も大幅に減少していたとのことだ。水曜会の議事録やルーム雑誌、皆で集めたヒマラヤ、南極やブータンの資料、私が吉井良三先生にお願いして山岳部に寄贈していただいた三高山岳部の「青

雑誌」などはどうなったのだろうかと思う。当年とって七一歳ともなると、自分の資料や記憶もまったくいい加減なものになってしまった。しかしいかに私の個人的・主観的で少々不正確なものではあっても、手持ちのわずかな資料と、自分の中にある当時の山岳部の雰囲気の残像を発表しておこうという思い止みがたく、あえて本文を投稿することにした。ホームページのようなデジタル記録の寿命は現在のとこそう長くはないことを考えると、ホームページとの重複が多いとはいうもののやはり活字媒体で残すべきだという編集者の前田司さんの意向に甘えて、ニューズレターに投稿することにした。

ここでお許し願いたいのが、山岳部の思い出ということになると、どうしても私個人の山との関わり、個人的事情の変遷抜きには考えられない。その上、これまでA A C K諸兄の発表された記録や文章を拝見すると、そのほとんどすべてが客観的記述を旨として、そこに至った個人的背景、主観的記述が少なすぎると思う。公式記録の場合はしかたないが、私としてはやや食い足りない思いで読ませていただいていた。その中で、客観的でありながらご本人の人格と感情が読者に強く迫ってくる文章は、上田ポツポ兄の「残照のヤルン・カン」\*が最良のものであると思っ

に豊かで素晴らしい経験を積み重ね、立派なお仕事も成し遂げてこられた多くの先輩や友人を差し置いて、大変おこがましいとは思っただが、図々しく「隗より始めよ」と思いきることにした。何よりも本誌はあくまでも法人の公式刊行物であるという枠に抵触するのではないかという危惧はあるのだが、そのような出版物の中にも随想などが掲載されていることもあるようなので、曲げてご了解願いたい。

### 個人的背景

「吉野君は農学部でなくて、山学部出身だったものね。」

常脇恒一郎先生が私に、まじめそうに冗談を言ういつもの笑顔でおっしゃった。一九九四年三月京大の学位授与記念パーティーの席で、先生にお礼を申し上げた時だった。

「えっ？」

私は一瞬、参ったな！と思うしかなかった。反論のしようがないのはわかりきっていた。

しばらく本題と離れるが、私の山との関わりとは切り離せないことなので、私の生い立ちの一部を述べておきたい。

私がこの世に出てきたのは、一九四〇年二月三日、東京都新宿区信濃町八番地二という所だった。東京ではかなりよいところだったと思う。我が家は先祖代々の江戸っ子で、私も東京の山手以外はどこも知らずに育った。

終戦時は東京郊外の調布、多摩川のすぐ横



赤城山大沼にて・小学五年生の時妹二人と

に住んでいた。父の勤務先が陸軍の調布飛行場だったのだ。終戦直前は毎晩都心が燃えるによる空襲で真っ赤に燃え上っているのを見たり、家にも焼夷弾が落ちてきて、防空壕の中で祖父に抱きしめられていた。怖さよりも、祖父の顎髭がほつぺたに痛かったほうが記憶に残っている。

母は手先が器用で、自分の着物をほどこいては子供たちの服を作ってくれた。赤い襦袢で仕立て直した服を妹が着て私と庭で遊んでいた時、突然上空からアメリカのグラマン艦載機が機銃掃射してきた。二、三〇m必死に走ってやっと家に入れたこともあった。また、低空飛行してきたグラマンが撃ち落とされて多

摩川の河原に墜落、パラシュートで脱出したパイロットが憲兵隊に捕まえられて何一〇人もの人々に半死にされたこともあった。

終戦前から、私はすぐ近くにある朝鮮人部落の子どもと友達になっていた。両親は世間体を慮って、なるべく人目に立つなよと注意してくれていた。当時、朝鮮人は徹底的に差別されていたのだったが、彼らの普通の日本人とは違う生活様式や食べ物には私にとってとても新鮮な驚きだった。

終戦後間もなく、軍隊がなくなったため、浪人中だった父が先輩の世話で法務省に採用されて、前橋市の少年鑑別所の所長に赴任したため、小学校後半の三年間だけは前橋に住んだ。

前橋は群馬県の県庁所在地、歴史ある板東は上毛野国、上州の中心である。ここでの生活は、私にとってすべて新鮮な驚きばかりであった。家からちよつと行くと、利根川にかかった長大な大渡橋、なん百メートルもの川幅の中に激しく青白い流れがドカンドカンと河原の石を噛み、ところどころ広く深いたるみになっていて、その間に幾筋もの小さい流れがあつたりする。まだたくさん自然堤防が残り、大雨の後は洪水の危険にさらされた。見渡す限りの桑畑の向こうには長く雄大な裾をひく赤城山が平野を圧倒し、榛名山は利根の向こうに穏やかに、また妙義山はさらに遠くギザギザの山稜をきわだたせ、ならからでやさしいカーブを持つくせに頻繁に火山灰を降らせる浅間山は常に噴煙をたなびかせてい

た。近所の家では、お母さんやおばあさんがクツクツと日がな一日、鍋で蚕の繭を煮ては竹箸と指で器用に糸糸をたくし上げていた。

小学校は木造校舎の敷島小学校。大きな桜の木がある土の校庭では、みんながはだして遊んだ。校舎に入る前には足洗い場で足を洗った。通学もはだしの子が多いくらいだった。戦中・戦後の栄養不足のせいだったのだろう、青っぱなをたらした子やトラホームでただれ目の子も多かった。言葉も上州方言の「ダンベー言葉」で、男も女も「おれ」。頭も男の子は坊主頭で女の子はおかつぱだ。

そこに放り込まれた私は、ズックの運動靴をはく「ぼく」。父母にはいつも「お父様、お母様」。いわゆる「坊ちゃん刈り」で、アイロンの折り目が入った半ズボンに襟が広く白いシャツ。まして「熙道」<sup>ひのみち</sup>などという奇妙な漢字の名前。

と、こうきては、だれが見たって、こっけいなほどこに場違いだった。学校全体にとって、少なくとも同級生達にとっては、面食らうと同時にこれほど迷惑なことはなかったのではないか？一九四九年当時の地方都市は、東京からこんなに近くてもそれほどちがっていたのだ。

言うことなすことすべてかみあわず、だれよりも傷ついていたのは本人だった。子供の間で当時最大の娯楽だったドッジボールで玉を受けようとする時に、ついズボンの折り目を指でちよつとつまみ上げる私の癖などは、絶好の嘲笑の的になった。せつかく、今のイチローの打席でのポーズの元祖だったのに！

更に悪いのは、同年の子達に比べてダンツツに高い学力差だった。私はこれにさえ犯罪者のような心理的圧迫をおぼえて、わざとまちがった答えをしたりした。

たまりかねて、数週間で丸坊主にしてもらった。家を出るとすぐに運動靴をぬいで、痛い足をがまんして歩いた。はだしにはすぐ馴れたが、言葉のほうはなかなかだった。

担任の先生は図画が専門で、私も絵を描くのは好きだったのは幸いだった。同級生もそれを認めてくれたのか、このへんから徐々にうちとけてくれたようだった。

しかし何よりもすばらしかったのは、東京では考えられないのびやかな自然の中での経験と感激にひたる毎日だった。木杵の底にガラス板をはめ込んだのぞき眼鏡を作って、利根の流れにつかり、手製のヤスでドジョウ、鱈の先に棘をもつギユウタ、鮎さえも突くのはすぐ上達した。もぐって石につかまると、横を遡上していくアユを手づかみにするというスゴ技ではだれにも負けないまじになった。石で流れをせき止める「かいぼり」をしては、流水でたき火をおこし、小魚をフライパンで醤油炒めにしてはむさぼり食った。高崎の近くまでも歩いていって、田んぼの用水で大きなナマズやザリガニをバケツいっぱいに取り、母に得意になって差し出した。ある時はあまりたくさん採れたので風呂桶に入れておいたら、母が知らずに風呂をたいてしまいい、大騒ぎになったこともあった。赤城の裾の小さな丘の南側にはたくさん湧き水が出ていて、きれいで浅い流れ出しの中には、縄

文土器の破片がいつばいあった。家の縁側の日だまりの中で、それらのすばらしいコレクシオンを広げては、古代人の生活を想像するのは夢を見ている思いであった。桑の実がみる頃には、手も口も服も紫に染めて、「食べ過ぎたらお腹をこわすよ」と母に叱られた。お祭りの夜には、串に刺して焼いて醤油味のタレをたっぷりつけた、前橋名物の素朴な「焼きまんじゅう」を堪能した。年配のおばさんが一坪ほどの店先を開いている駄菓子屋さんでは、五円玉をにぎりしめながら、クジつきのあれこれを、どれにしようかと必死に悩んだ。父にたのんでセメントを買っても

らい、庭に二坪もの池を作った。セメントのアクを抜いてから、利根川の砂、桑畑の土、水草、小川の岸の草や苔を植えこんで、我ながら傑作と言える池を作った。魚たちが冬越し出来るように、深く大きな甕も埋めこんだ。そこに、あちこちで採ってきたフナやコイ、カメ、サワガニを飼った。カメの餌用の小魚やミミズを集めるのには、ずいぶん手間がかかった。ホタルも放して、彼らが水にもぐっては水辺の苔に産卵するのに驚いていた。庭の隅には、近くの山から採ってきた草花を植えた。食べられる山野草もすぐ覚えたり、自分流に料理(?)するのも得意なものだった。私は一度見た草花の特徴や名前はずぐに覚えられたし、それらを描くのも好きだった。

たった三年間の間に、よくもこんなにたくさんの方ができたものだったと思う。私は、自分がそれまでとはすっかり変わってしまったのがわかっていった。

中学入学後一週間で、父の転勤で東京に戻ることになった。駅まで見送りに来てくれた同級生の一人が赤城山の絵を描いて饞別にくれたのがとてもうれしかった。

東京に帰って、「青山南六丁目」に住んだ。今は「南青山」と名前が変わってしまったが、私は今でもそう呼ぶのには抵抗がある。私の生まれた信濃町からは、中央線の線路を渡って神宮外苑、神宮球場と青年館の横を通って青山通りを越せばすぐの所だった。家の墓がある青山墓地は谷を一つ隔てたすぐ近くの遊び場で、桜並木と道のたたずまいは今でも変わらず、上京する時は必ず訪れている。おそろく、皇居周辺やいくつかの旧大名屋敷庭園である公園と同様、都内での広い敷地としてはもともとも変わっていない場所の一つだろう。家のすぐ近くの根津美術館はほとんど訪れる人もなくさびれていて、広大な園内は深い木立に埋もれて、野鳥やコジュケイ、ザリガニ、小魚がたくさんいた。私たちのお気に入りの遊び場だった。

青山中学に入ったが元の校舎は戦災で焼けていたので、初めのうちは家のすぐ横にある西南小学校と同居だった。やがて青山一丁目の陸軍士官学校跡に移った。当時の日本では最高の敷地と校舎の中学だった。

しかし私は最低にみじめだった。まず言葉。上州弁がしみついていった。学力も。これはひどいものだった。すばしっこい東京の子にとつて、私はかっこうのえじきになつてしまった。東京―前橋―東京と移る間に、言葉にも学力差にも上下両方向で二度も

悩まされたわけだ。

昼食時間にカバンを開けたら、弁当箱がすっかり空になっていた。イジメ(当時はこんな言葉はなかったが)に会ったのだ。私はわけがわからずにオロオロしただけだったが、母は頭に来た。母の猛特訓の日々が始まった。そしてほぼ一年で人並みの成績に回復したが、その後は自分だけで勉強させられた。この時の母の迫力には今でも頭が下がる。三年になった時には、張り出される実力テストの発表では常に学年五位以内に入れた。クラブ活動でも、バレーボールをがんばったおかげでレギュラーになり、東京都大会で一位、二位を経験できた。まあ、なんとか東京の子に戻れたのだが、なんといつてもまだ、前橋での日々が懐かしかった。竹の横笛とハーモニカを吹くのも好きになり、昼休みの教室で一人で吹いたりしていた。そのうちに同級生の女の子が横で、それを聞いてくれているようになったりした。淡い思い出だ。

高校は都立九段高校に入った。中央線飯田橋駅から上った坂の上、靖国神社の隣で、すぐ隣には暁星高校、百合学園があった。一駅離れて後楽園球場、市ヶ谷やお茶の水の江戸城内堀がひろがっていた。また都合の良いことに、父の転任で引っ越した先が、武蔵野台地の端、牛ヶ淵を従えた九段坂の上、昔の江戸湾に向けた灯台があった所、田安門のすぐ内側だった(現在は武道館という不細工な建物が建っている)。少し奥に歩いていくと、苦学生のための青年会館というのがあって、毎日、家の横のパン屋で薄い食パンにわずか

のマーガリンやいちごジャムを塗ったのと一  
ピンの牛乳を立ち食いする学生を見る日々  
だった。もつと食べさせてあげたいな、と思っ  
たことだった。高校一年になっても、そんな  
程度の繊細な感情の若者だったのだ。

九段高校は旧東京府立一中である日比谷高  
校と並んで、旧東京市立一中という名門であ  
り、戦前からユニークな教育方針を貫いてき  
た学校だった。飯田橋駅からゆるゆると坂を  
上っていった先にあり、また青山からは都電  
で赤坂見附を経て靖国神社で下りて大村益次  
郎の銅像下を突っ切った所にあつた。階段方  
式の重厚な講義室があるのには圧倒されて、  
ついまじめな顔で授業を受けた。都内で唯一  
温水プールを持ち、房総には至大荘という海  
の合宿所を有していた。そこでの一年生夏の  
必修合宿では、先輩のワルたちが夜中に「ス  
トーム」と称して乱入しては、「君が一世一  
は、千代にー八千代に、さざれいーしのラ  
ララー、踊れ天チャン、踊れ天チャン、苔  
のむすまでー」などという、不敬罪ものの歌  
を私たちに歌わせるのだった。ぜいたくで  
ゆつたりした校風の高校だった。夏には男子  
は赤フンドシ、女子は黒い水着で太鼓の調子  
に合わせて遠泳をした。泳ぎ終わって浜にた  
どり着いても立ち上がれず腹這いのままずり  
上がって、葛湯を口に流し込んでもらった。  
産卵に上陸した海亀の態であつたが、その達  
成感はたいしたものだった。また皇居内堀一  
周のマラソンと冬の柔道か剣道の寒稽古が必  
修になつてきた。よい友達にも恵まれた。成  
績もまずまずで、いつも張り出される実力試

験の成績では学年の五位以内は維持できた。  
クラブ活動ではバレーボールを続けて主将に  
なつたが、受験校のためいつも部員不足、試  
合にも出られないくらいで往生したが受験直  
前までふんばつた。一方、アイススケートに  
熱中した。飯田橋の隣の水道橋には後楽園球  
場があり、そこにアイススケートのリンクが  
あつた。体育のスケート授業に出て以来すつ  
かりその虜になつた。こんな面ではバレー  
ボールや運動会の徒競走（マラソンは好きで  
速かつたが、短距離は嫌いだった）ではあま  
り感じなかつたが、自分の運動神経はかなり  
優れていることを初めて実感できたのだ。し  
かも冬の間は早朝時間帯格安割引があつた。  
スケート靴を借りる料金も安いものだった。  
毎日登校前に通い詰めた。とうとう親に頼ん  
でまずフィギュアアの靴を買ってもらつた。  
小遣いを貯めて、後にホッケー靴に替えた。  
何回かバス・ツアアで山中湖に行つたが、初  
めはセミ・ロング、すぐにスピード・スケー  
ト用のロング靴を借りて滑りまくつた。

ここにきてやつと東京つ子復帰は成つたわ  
けだ。しかし二年頃から同級生と奥多摩や富  
士五湖へキャンプに行き、中でも、那須岳で  
は猟師の小屋に泊めてもらい、大きな鱒の刺  
身と天然ワサビをごちそうになつて大感激で  
あつた。

前橋でひたりきつた自然の思い出がよみが  
えりつつあつた。たまたまマナスル登頂の映  
画を見たことも手伝つて、都会での暮らしを  
あきたらないものに感じてきていた。

父方が代々医者の家系で、私もなんとなく  
東大の医師コースに行くべく受験したが二次  
試験で落ちた。だが別になんという悔しさも  
感じなかつた。本気ではなかつたのだと思う。  
浪人してすぐ、親友と二人で南アルプスの  
鳳凰三山にでかけた。それまでに登つた一番  
高い山だった。雄大な北岳や間ノ岳などの素  
晴らしい眺望を楽しんだが、下山路で獣道に  
踏みこみ、いつのまにか急な谷筋を下つてい  
た。すぐに引き返すべきところをそのまま  
下ってしまった。日が暮れて行動不能とな  
り、岩陰で一夜をすごした。長い夜が明けて  
谷に差し込んできた太陽ときれいな小鳥の鳴  
き声に励まされ、滝や岩に阻まれ、雪渓や藪  
に足を取られながらもやつと麓の道にたどり  
着き、家に電話をした。母はたいそう心配し  
て警察に届けると騒いだらしいが、父は明日  
まで待てと言つたらしい。

遭難といつてよい経験であつたが、私には  
鮮烈な山体験となつた。この時私は、これか  
ら毎月一回は山に登ろう、大学で山岳部に入  
るまで自分なりに経験も積み体力もつけよう  
と決心した。それからは米と味噌、わずかな  
缶詰やおやつ、交通費と小屋の素泊まり料  
金ギリギリの小遣いを手に、奥秩父や丹沢、  
八ヶ岳に行つた。受験勉強の傍ら、神田の古  
本屋街や図書館で山の本を捜し歩いて、木暮  
理太郎、冠松次郎、加藤文太郎、串田孫一た  
ちの紀行やみずす書房のアルプス・ヒマラヤ  
の本を片っ端から読みふけた。

武甲山に行つた時、道が通れなくなつてい  
たので予定とはちがうルートから下山してみ

るとダム工事中で、あるはずのバス停がなくなっていた。しかたなくダンブの土埃道を歩いた。バテバテで休んでいると、おじいさんが「どうしたんだ？」と聞いてきたので事情を話すと、「ちよつと休んでいけ」と家に連れて行ってくれ、茶漬けとせんべいを食べさせてくれた。「歩いて行けるから」と固辞したのに五〇〇円貸してくれ、その上おばあさんが「お母さんにあげなさい。あつたかいよ」と、手作りの真綿までくれた。帰宅したら母が感激して上等な和菓子私を私の札状に付けて送ってくれた。

またある時、父が「おれも一緒に行く」と言い出して、甲武信岳に向かった。初日の昼飯に父はビールを飲んだが、そのあと登るのに息を切らせ始めた。やがてポツリと「おれは帰る。気を付けて行って来い」と帰って行った。父はスポーツ万能で体力抜群ではあったが、この時は調子が狂ってしまったのだろう。後に私が山岳部で登っているのを耳にした叔父が「そうか、お前の親父も昔は谷川岳を登ったり、富士山の強力と酒の飲み比べをしたりしてたからなあ」と言った。私は初めてそんなことを知り、何も言わない男親の気持というものに触れた思いがした。

一方、神田の小さな紙工場でバイトを続けて、神田の水野運動具店でまず登山靴、それも靴底に鋏が打ってあるナーゲル靴を買った。次いでピッケルを買った。ピッケルは札幌門田製の人気が高かったが、カーブが繊細な秋田森谷製のを買った。父が一緒についてきて品定めを手伝ってくれた。もつとも私は

ずつと前から通い詰めながら、羨望のまなざしで秘かに買うものを決めていたのだ。さすがにうれしくて、何日も頬ずりせんばかりに保革油や亜麻仁油で磨き立てた。

山岳部に入って最初の北山新人歓迎山行の時、誇らしい気持ちでそのナーゲルをはいて行ったら、地下足袋をはいた先輩連中みんなが「おー、ナーゲルやんけー！」とびつくりしたものだ。北山に行くのに登山靴を履いたり、ましてナーゲルなど持っている者は一人もいないのだ。当時はすでに若い登山者の間ではナーゲルはすたれて、先端的にかつ高価なゴムのビブラム底登山靴の時代に移行していたのだ。しかし私は最初の静原・金毘羅山で他の新人が地下足袋やビブラム靴でへっぴり腰で岩を登っている横で、軟鉄鋏の粘り強さをうまく効かせてスルツと上に伸び上がれた時は、内心（ザマあ見やがれ）と東京弁でほくそ笑んだ。その後岩登りは大好きになった。

私が京大農学部農林生物学科に入学して、入学式の日よりも前に西部構内の山岳部ルームを訪ねて入部希望を述べたのは一九六〇年四月だった。たまたまそこにいた上級生から「入部説明会があるから、それまで待ってください」と言われた。壁に写真がかかっていた。遭難した部員だということはずぐにわかって、厳粛な気持ちになった。

剣沢大滝やヒマラヤに至った山岳部のバック・グラウンド

京大山岳部は毎年夏には剣沢の真砂沢出合、時には穂高溜沢にテントを張り、岩登りを中心とした合宿を行っていた。これは一九六〇〜一九七〇年代の部員数が四〇ないし六〇名以上と多かったために、七月下旬から八月上旬にかけて、新人に対しての幕営、雪渓、岩登りの訓練とともに上級生の技術向上を目的として、前期・後期に分けて行なうのが常であった。これ以外の山行は四ないし六、七人の小人数によるパーティーを多数送り出すのが基本であり、夏山など多い時には合計三〇パーティー以上、二回生以上による雪山でも五、六パーティーの山行を出していた。夏以外の合宿は、一回生向けの一月の富士山でのアイゼン訓練と一二月から一月にかけての妙高高原・笹ヶ峰ヒュッテでのスキー合宿だけであった。当時のほとんどの大雪山山学部は、ふつう全員による合宿中心の山行をしていた。しかも彼らの多くは、いわゆる体育会系運動部に見られる、旧軍隊のような「シゴキ」による新人いじめと傲慢無礼・前近代的な上級生への絶対服従を当たり前のこととしていた。まだ体力も技術も伴わない一年生が一番重い荷物を担がされ、上級生はうしろから軽い荷物だけを持ってふんぞり返って行進する。また極端な例であるかもしれないが、一日の行動が終わった時に、一年生が上級生の靴ひもをほどく、などという信じられない光景もよく見られたのだ。とうてい大学生とはいえない低能ぶりとしか言いよ



うがない。

この点で、京大山岳部は大きく異なっていた。それは何よりも、「パイオニア・ワーク」という目標と「オールラウンドにしてコンプリートな山行」に対することで表わられていた。このこだわりは単なる標語以上のものとなつて、山岳部員のメンバーの日常生活にもしみついていと言つてよい。世間は、京大が探検大学と呼ばれるようになった戦前からの実績を持ち、また湯川博士のノーベル賞に結実した先進性、官僚の母体となつてきた東大に対して、滝川事件などに示された在野性とアカデミックな精神を有する大学であることを、漠然とではあつても知っている。

しかし「山岳部」といえば、「シゴキ」とすぐ連想される、体力第一・序列絶対のゆがんだ精神主義が支配的であるのは当たり前と考えられていて、たとえ京大といえどもその点では同類と思われていた。現に私なども浪人中に慶応大学の山岳部員であつた高校の先輩に、京大に入って山岳部をやりたいという希望を話した時、「京大か、さぞきついだろうな」と言われた。彼は心配そうに私の細い体を見やつたものだ。だから入学式直後の新生に対する部の説明会で三回生の新人係が「京大ではシゴキはやりません。あくまでも自主性を尊重します」と言つたつて、全然信用できなかったのだ。しかし北山への新人歓迎山行、五月山、夏山と過ぎ、またその間に山行計画検討会や報告会、部の運営を検討する水曜会の、全員一致を原則とする徹底的な合議制の中で、未熟な一回生ではあつても自

ら思う所を述べる事ができる経験を重ねるうちに、これが嘘ではないことはすぐわかつた。

私たち昭和三五年入学までの新生は、吉田の教養部ではなく、宇治市木幡の旧陸軍火薬庫跡にある宇治分校で授業を受けた。山岳部一回生専用の小さなルームもあつて、私たちは暇さえあれば集まり、山行の相談、歌の練習、トレーニングに励んだ。

毎週水曜日には朝からソワソワした。京都のルームで「水曜会」があるのだ。これは山岳部の意志最高決定機関であつた。私などはしょっちゅう授業をさぼつては早くからルームに行き、地図を案じたり山の本を読んだりした。あたかもデッチの里帰り、まことに楽しい日なのだった。

山岳部のルームでばかりでなく、ヒマラヤやカラコルムの経験者さえ含む先輩や上級生、同回生の下宿で、さまざまな知識を吸収しつつ、談論風発する中で論理の鍛錬さえ学んだ。それは山行中の食後の一時などでも行なわれた。一種の理想的なセミナーと言えるものだった。少しあとになるが、雪山での悪天候による沈殿日（私たちは「チン」と呼んでいた）には、下級生から始めて皆が、自分の専門分野における勉強や卒論の状況や興味を抱く対象や趣味の世界など、なんでもよいからレクチャーを行なうのが常であつた。必要最低限なこと以外には何もすることがなくメシさえ半分に減らされるチンの日には、シユラーフをひつかぶつて口だけを動かすこんな作業は絶好の時間つぶしなのだった。

このような生活を経験すれば、わずかの間によその多くの大学山学部や社会人山岳会とは全く違う思想、登山に対する考え方を身につけていくのは当たり前であつた。

なぜこのような違いが生じたのだろうか？ 一つには、京都という長く困難が続いた歴史を持つ町の重み、その中でしぶとく生き抜いてきた町衆の雰囲気があるだろう。京都は、新興勢力の大勢には染まらず、しかも新技術や新知識に対して批判的な目を向けつつ冷徹な判断を下して、いつのまにか自分のうちに取り込んで新しいものに展開してしまふ、というふてぶてしさを持つ町と人なのだと思う。

そこに集つてきた京大の学生全般に言えるのかもしれないが、山岳部には京都の出身者は一割もいないし、また山などの経験は無いといつてよい者ばかりであつたものの、京都的<sup>な</sup>物の見方が基礎にある山岳部の目的や方針に抵抗感を覚えさずに入つていける素質を持つ人間が多かつたように思う。「生意気な」奴が多かつたと言えるかもしれない。悪く言えば我が強い、良くいえば個性的、である。そんな人間が、自主性を持つて自由に自分の意思や世界観を表明できる環境の中で良い方向に向かえば、急速に成長できる可能性があるのだつた。

京大山岳部では、毎年一〇月山の後で部の執行部が交代した。リーダー一名、サブリーダー二名、新人係一名、会計係を兼ねるマネージャー一名、ヒユッテ係一名が三回生の合議で選ばれ、それを水曜会が承認する形を取つ



吉野コッペ・二回生頃の春山らしい

ていた。各山行についてはパーティー・リーダーとサブリーダー一名ずつが推薦され、水曜会が承認した。

どの回生であろうと自分で山行計画を立案することができる。それに賛同したメンバーが数人集まれば自然にパーティー・リーダーが決まるのが普通だったが、下級生がリーダーをリクルートすることも多かった。立案から水曜会での検討に耐えての承認、山行の実施、終了後の山行報告会、山岳部報告の原稿執筆と進むうちに、お互いの人柄、長所、欠点などが共有される。それらが噛み合わずにギクシヤクすることがあるのは当然だが、山岳部ではどういふわけかそれが致命的になることはまず皆無であった。それは合議制を原則としながらも、合理的で強いリーダーシップと自主的なフォロアーシップがうまく機能していたからだと思われる。そのペース

にあるのは、「個性を認めその人格を尊重する」というごく当たり前のことである。個性の強い人間の集まりであるだけに、好悪の感情を越えてとにかくまず、他人の個性は自分の個性と同じ価値を持つことを認めねばならない。だいたいそうでなければ、自分の個性さえも否定することになるのだから。だから自分の意見はあくまでも主張する

が、リーダーがひとたび決定したことはフォロワーとして全力を尽くして協力する。一方リーダーもけっしてゴリ押しはしない。なぜそういうことが可能かといえば、いくらフォロワーとして万全であっても、彼らのすべてが優れたリーダーになれるとは限らないからだ。優れたリーダーになれるのは、やはりごく一部の人間である。だがリーダーにふさわしいかは、ある水準以上の知能を持った人間が冷静に判断すれば、つきあい始めてすぐにわかってくるのだ。

このような背景の中で積み重ねられてきた山行の多くは、その都度組み合わせの異なる様々な個性が一つの目的に向かって議論を尽くして練り上げた計画が全員参加の水曜会の検討を経て実行された。登り尽くされた観のある国内の山であつても、どこか一工夫こらした計画が追求された。一九五〇、一九六〇年代には、日高、知床、東北はもとより、北

アルプスにおいても黒部川、剣岳をめぐる、当時まだ完全遡行の成されていないいくつもの谷があつた。それらを目指す人々もいたが、谷川岳や穂高での初登攀ルートを狙う方が登山関係の雑誌などで華やかな扱いを受けることが多かった。その中で京大は黒部川を中心とした未開拓の沢登りに集中した山行を行なつて成果を挙げてきた。当時一部の人には名前だけが知られていて「幻の大滝」などと言われていた、剣沢大滝を登ろうという機運が高まつてきたのは、当然と言えば当然の成り行きなのであつた。さらにその勢いはヒマラヤへと向かつていったのだった。

ここらで少し違った面から、山岳部とその周辺を巡るいくつかの断面をとらえてみたい。

#### あるリーダーの一面

木原・今西・桑原・西堀といった大先輩以来、私を知る限りの歴代の京大のリーダーはすべて、人格的にもまた社会活動面でも人に敬慕され、しかもそれぞれが二人とない強烈な個性に満ち溢れた人々であつた。

中でも代表的なリーダーとしてあまりにも有名ですでに半ば神格化されている、今西錦司先生（あだ名と言えるかどうかわからないが、私たちは「錦さん」と呼んでいた）についてのエピソードを少し紹介しておきたい。先生の若き日の心の内面にも触れるプライベートなことではあるが、鬼籍に入られてからの日時の経過に免じていただき、また今は亡き桑原武夫先生（桑はん）のお許しをも乞いつつ、敢えて紹介したい。これは、私が

ブータン入国のために必要なインド政府のインナーライン・パミット取得のため、ニューデリーで連日外務省通いをしてきたがパミットが得られないまま、日程が詰まってきたために来印された桑原先生が一夕、クラリッジ・ホテルで食後のブランデーを楽しみつつ、話されたことである。なお、この時には笹谷哲也(べべ)さんも同席されていた。

桑原先生曰く、

「今西がわしより先に死んだら、あいつのいろいろなことを書いてやるつもりなんや。」

「今西はなあ、横暴なリーダーやったでえ。あいつがトップで歩いてる時に、うしろで、このルートはちごーてるのやないか?なんて言うのと、つかつかつと戻ってきよって、いきなりボカんとどやしつけるのや。そのまんままっすぐ進んでいきよる。」

「朝方暗いうちに電話してきよってなあ、「今京都駅や、来てくれ」って言いよんのや。行ってみると、青い顔してベンチに屈みこんどる。なんも言わんから、黙って連れて帰ったけど、そんなん何回もあつたで。」

桑原先生は一九八八年、今西先生は一九九二年に亡くなられたので、結局以上のような話を含む桑原先生の文章は残されていない。AACKの他の人がもつといういろいろなことを桑原先生たちから聞いているかもしれないが、私が聞いて覚えているのは以上のことだけである。

私たちが信じていた伝説では、錦さんの家は西陣でも有数の織屋で、家作だけでも何十軒もあったのを錦さん一代で食いつぶし

た、ということになっていった。日本の登山黎明期であつた頃は、東京を中心としたごく一部の旦那衆や慶応大学などの金持ちのボンボン学生たちだけが、何人もの地元の猟師や山人などをガイド・人夫に雇って大名登山をしていた。京都一中時代の北山・比良の山河や生物に親しむ山行に続いて、三高・京大で彼らに張り合つて、当時としては先鋭的・挑戦的な山行をリーダーとして次々に行なつた錦さんの活動を考えると、この伝説も「さもあらなん」と思われてくる。

さらに、妙高高原に笹ヶ峰ヒュッテを建設したのも、錦さん、桑はん、西堀栄三郎先生、四手井綱彦先生、綱英先生ご兄弟など京大山岳部を創設したメンバー、いわゆる「昭三組」(昭和三年京大卒業)他に代表される一派であつた。ヒュッテに京大洛友会館のフランス料理のシェフを連れて行つて豪華なパーティーをしたなどという話を聞けば、なるほど納得したものだ。ヒュッテの玄関には、京都帝国大学笹ヶ峰ヒュッテを表わす *Hütte Sasagamine Die Kaiserliche Universität zu Kyoto* というドイツ語飾り文字の看板がかつていて古き良き時代を主張していたのだつた。

### 笹ヶ峰ヒュッテ余談

京大に戦後移管された笹ヶ峰ヒュッテは厚かつ瀟洒な木造造りで、京大の学生・職員のための福祉施設として、山岳部が大学から管理を委託されていた。周辺は新潟県営の牛馬のための広い牧場で、妙高、火打、焼、

黒姫の山々に囲まれた、標高一三〇〇mにあるすばらしいヒュッテだつた。夏と秋の休みには他大学の学生(ほとんどが関西の女子大生だつた)にもわずかの宿泊料をもらつて開放して、部員が食事・登山ガイドなどの世話をしていった。その収入が部の最大の財政基盤で、この点だけでも他の大学山学部比べれば大変恵まれていたのである。ここは現在でも完全に改造・新装されながらも、薪ストーブと石油ランプに象徴される昔の雰囲気はそのまま残し、スキー合宿や季節に応じてピアノ演奏なども行つて、多くの人々にゆつたりできる時間を与えている。

私たちにとっては、いくつかの夏山山行の間に京都に帰らずに小屋番をすれば、生活費も交通費も浮く。受験勉強に明け暮れた後に、山行と山岳部のルーム、仲間の下宿、間であちよつと講義出席という、三角パスの生活の中で、ヒュッテで何日間か華やかな女子大生を山に案内したり、夜には大きなたき火やランプの明かりの下に集まつて山の歌を歌つたりするのは、本当に目くるめくような素晴らしい経験なのだつた。

私が一回生の時には、三回生の太竹三雄(オタケドン)さんが大変有能なヒュッテ係として君臨していて、「メシをおかずにしてメシを食え、いや、塩をおかずにしてメシを食え」と言つたなどという伝説があつた。実際にはそれほどひどくはなく、ヒュッテ建設以前から三高・京大の山岳部を支援してくれていた、杉野沢村の竹田家(当時はご主人よりも、ピアニがご自慢の元気な、あねさ)が大黒柱で

あった)からバスで上げられてくる野沢菜や米、味噌などはそこで味わえない美味であり、これに魚肉ソーセージか生卵か干鰯か目刺が少しあれば言うことはなかったのだ。しかしやはりその単調さはどうにもならなかった。お客さんを山に案内して昼飯時になると、お客さんからはちよつと離れてこそそこそとタクアンや野沢菜をおかずに飯蓋飯をかつこんでいると、「これ、ごいっしょにどうぞ」と声をかけてくれることも多く、そんな時はその人にいつべんに惚れてしまうのだった。私たちの山行は沢登りが比較的多かったし、それ以外の無雪期の山や岩登りでも、そしてしょつちゅう行く京都北山の峠歩きやヤブ漕ぎでも地下足袋を愛用していた。安価で日本の山を足でじかに味わうには絶好だったからだ。ビブラム靴は当時すでに一般化していた

## AACKニュース

### 平井一正氏の

#### 日本山岳会名誉会員のこと

芳賀孝郎

平井一正氏は昨年一二月三日の日本山岳会年次晚餐会で新名誉会員として紹介された。

平井氏は名誉会員になった喜びの挨拶を述べた。「いつのまにか八〇歳になってしまった。美しいものに感動し、未知なるものにくるときめかす、そうしていれば若さがついてくる」云々との話は皇太子はじめ四二五名の

とはいえ、やはり私たちにとつては普段の山行に履くには高価なものだったのだ。

お客さんのうち特に山好きの女子大生の中には、「どこかで赤い地下足袋を売ってないかしら?」とたずねて、私たちを感涙にむせさせてくれた人もいた。もちろんそんな人に惚れなくては山岳部員の名にかかわるから、町に帰ってから果敢にデートを申し込んで、いかんせん、山では頼りがいのある山男であつても都会にあつては単なる山だして、あえなく討ち死にを遂げる者もいた。それでも、ヒュッテでの出会いが実を結んで結婚に至つたカップルは結構多かった。実は、私もその口だった。

\*上田豊:「残照のヤルン・カン」、中央公論社、東京、1979。

会員に感動を与えた。

壇上に立つ平井氏はいつともより大きく見えて、私は名誉会員の推薦人の一人として誇りに思つた。

平井一正氏は一九五八年チヨゴリザの初登頂者(日本人初のヒマラヤ七〇〇〇m峰登攀)その後も半世紀に五峰の初登頂の隊員及び隊長として活躍した。その登山歴は左記の通りである。

一、一九五八年 チヨゴリザ(七六五四m)  
初登頂 登頂隊員 AACK隊 二六歳  
二、一九六二年 サルトロカンリ(七七四二m) 初登頂 隊員 AACK隊 三〇歳

三、一九七六年 シェルピカンリ(七三八〇m) 初登頂 隊長 神戸大学隊 四四歳  
四、一九八六年 クーラカンリ(七五五四m) 初登頂 隊長 神戸大学隊 五四歳

五、一九八八年 チェルー峰(六一六八m) 初登頂 名誉隊長 神戸大学隊 五六歳  
六、二〇〇三年 ルオニイ峰(六八〇五m) 登頂失敗 隊長 神戸大学隊 七一歳

これらの登山のみでなくクーラカンリ登頂後ラサから成都までの横断山脈三〇〇kmの学術調査を行い、世界ではじめて川蔵公路の山々や動植物などを日本に紹介した。横断山脈の初踏破をし、横断山脈のバイオニアである。

このクーラカンリ登山に協力してくれた中国地質大学との交流が始まり、中国地質大学の教官と学生を日本に招待し、神戸大学と北アルプスでの合同登山をするようになった。その後の交流登山は日中友好に大きな貢献をした。

若き登山者の育成にも大きな影響を与えてきた。一九七〇年エヴェレスト、一九八〇年チヨモランマ、一九八四年カンチェンジュンガ、一九八八年三国縦走登山などの登山隊に平井氏の後輩が多数参加している。

平井氏は英語・ドイツ語・中国語の語学力により一九五八年アメリカガッツシャープルムI登山隊長クリンチ(元アメリカ山岳会会長)、ブロードピーク・ダウラギリの初登頂者、デイエンベルガー、ハイクヘルらのドイツ・オーストリア山岳会、史占春らの中国登山協会等との国際交流にも尽力した。

平井氏の五〇余年にわたる無事故の六回の海外遠征実績は日本の登山界へ大きな影響を与えた。且つ多くの大学山岳部、若き登山者へ夢と希望を与えたことは高く評価されるところである。

私は平井一正氏の日本山岳会名誉会員の推薦にあたり、「彼は日本山岳会の遠征隊に参加していない、理事・評議員の実績がない等の理由で名誉会員推挙は難しい」との意見を耳にした。しかし私はそうは思わなかった。平井氏は日本山岳会の実務実績はないが日本登山界に与えた影響力は大きいのである。日本山岳会の伝統は未知の世界の挑戦と開拓である。平井氏のカラコルム・チベットの登山実績も、また横断山脈の初踏破もまさにその伝統の行爲である。

世界最初の山岳会・英国山岳会（創立一八五七年）は登山経験がないジョン・ラスキン（一八一九―一九〇〇）を高く評価した。産業革命に沸く英国でラスキンが「近代絵画論」の中でアルプスの山岳風景の素晴らしさとその魅力を解いたからである。その当時の英国の登山活動を啓蒙し登山界に大きな影響力を与えた。そのことで英国山岳会は彼を名誉会員に推挙した。

日本のラスキンと呼ばれた地理学者・志賀重昂（一八六三―一九二七）が「日本風景論」の中で日本の四季の山岳美を称え、世界に類のない風景が近代化国家を目指す明治の日本人に紹介された。日本風景論が登山活動の普及に大きな影響を与えたことで、日本山岳会は志賀重昂を名誉会員に推薦した。彼も登山

はしていなかった。

今回平井一正氏の名誉会員推薦が評議員会議で審議された。報告によると平井氏の登山経歴とその実績は賛辞され、登山界への影響力は高く評価された。

日本山岳会の伝統は現在も継続されているのである。

私と平井氏との山仲間としての繋がりや簡単に述べたい。一九五五年一月三日日鹿島槍で学習院山岳部の遭難があった。黒部溪谷横断を目ざす登山中であつた脇坂氏と平井氏は搜索に協力してくれた。その時が平井氏の最初の出会いであつた。

その後チョゴリザ登山隊員に選考され、一九五八年五月八日神戸港から飯野海運・若島丸で二トン半の荷物と共に私は平井氏（当時金沢大学講師）と二人でチョゴリザへ出発した。チョゴリザでは藤平氏と平井氏の第一回のアタックのサポートをしたが私は残念にも高山病で再度のサポートは出来なかった。

チョゴリザの登頂成功後、八月一五日平井氏と私はハイポーター一人をつれてムスタグタワの東側を流れるバルトロの枝氷河・ピアンジェ氷河をつめての偵察と登山に発つた。食事は全て現地食チャパティ・スープ・紅茶のみであつた。ステステサドル（五八〇〇m）からムスタグタワの周辺を偵察し、シャクスガム方面の彼方に連なる山々を眺めた。八月一九日二人は四時四〇分五四〇〇mのキャンプから無名峰七一七〇mをラッシュユアタックした。急斜面の雪面を登りつめその後

水と雪がミックスした岩を慎重に確保しながらの登攀を続けた。ピトンを持たない危険な登高で目前のムスタグタワの高さとはあまり変わらない地点まで到達した。七〇〇〇mを越え私は未登の山頂を目指していた。平井氏の「危険を犯しての岩峯登攀を辞めよう」との言葉に無念のうちに従い下山した。

七〇〇〇m峰でも五四〇〇mからラッシュアタックで登頂が可能である貴重な一四時間の登山を経験した。当時としてヒマラヤでの日本人による初のアルパイン登山であつた。現在も私は平井氏と共に登山をすることができるのが幸いである。

### 梅棹忠夫・山と探検文学賞

ご存じの方もおられるとおもいますが、「梅棹忠夫・山と探検文学賞」の第一回授賞式が一月二日（水）午後二時〜四時、JR長野駅前前の平安堂長野店（ウエスト・プラザビル五階）で行われます。授賞作は角幡唯介著『空白の五マイル』（集英社）です。この賞は、梅棹さんの『山をたのしむ』がきっかけとなりました。ご関心ある方はどうぞよろしく。以下、梅棹さんの「創設にあたって」を紹介させていただきます。

### 「梅棹忠夫・山と探検文学賞」の創設にあたって

このたび、「梅棹忠夫・山と探検文学賞」がうまれました。世のなかには、個人の名まえを冠にした賞がおおくありますが、まさか、わたしがその仲間いりをするとは想像もしませんでした。

この賞がうまれたのは、二〇〇九年七月に山と溪谷社から発行されたわたしの著書『山をたのしむ』がきっかけになったと聞いておられます。この本は、永年、未知にあこがれをいだき、登山と探検にたしんできたわたしが、自分の人生をふりかえり、自分にとって山とはなんであったのかを見つめなおしたものです。

わたしと山との関係は京都の北山ではじまったのですが、旧制三高時代には、もっぱら信州で、オールラウンドな登山家としての本格的な訓練をうけました。そして、その後は学術探検家として活動の場を海外にひろげていったのですが、おりをみて信州に足をはこび、山とスキーをたのしんでおりました。わたしの山と探検のかかわりをおもいかえずと、この地域とのながくてふかい縁をあらためて認識させられた次第です。

その信州で「知」の領域をリードする信濃毎日新聞社と平安堂、そして山岳図書出版の老舗である山と溪谷社が「梅棹忠夫・山と探検文学賞」を創設されました。このことは、わたしにとってまことにうれしく、ありがたいたしです。関係の皆様がたに心から感謝いたします。

本賞の創設がきっかけとなって、登山や探検活動がさかになり、おおくの人びとの心に「未知への探求」の火が燃えさかることをねがっております。

二〇一〇年五月 梅棹忠夫

なお、同賞の連絡先は電話 0261-23-1361

Fax 0261-23-1730 e-mail: raum-ohgida@peach-plala.or.jp

斎藤清明記

### 松沢哲郎氏の著書に『毎日出版文化賞』

チンパンジー研究の第一人者として知られる松沢哲郎会員（京大霊長類研究所所長）が

### 図書紹介

「新選『ヒマラヤ文献目録』」

薬師義美編著 私家版

B5判、一二七五頁  
頒価二万八〇〇〇円



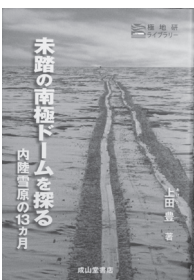
一九九四年に刊行された第三版『新版・ヒマラヤ文献目録』（白水社）は欧米などの山岳会の機関誌で

紹介されて好評であった。また欧米の古書店では、カタログに掲載したヒマラヤ関係の書籍にはこの目録の整理番号を付けて紹介されている。この『目録』にない場合にはわざわざ「NOT IN YAKUSHI」としてその本の稀覯性が強調される。わが国でもこの『目録』は、第一回ゲスナー賞（雄松堂）、第一回秩父宮記念山岳賞（日本山岳会）を受賞してい

昨年二月に刊行された「想像するちから」の著書にたいして、『毎日出版文化賞』の自然科学部門で受賞された。チンパンジーと人間と極めて近い両者の比較を通して「人間とは何か」を三〇年来追求してきた結晶。「人間とは想像する力だ」という一言に到達するまでの過程と証拠、そして想像する力がどんな意味を持つのかを、著者が『遺書』を書く気持ちで綴られている。

。それから一七年。継続していた収集資料を加えて、このたび大改訂の第四版・新選『ヒマラヤ文献目録』が私家版として刊行された。B5判、一二七五頁、収録は欧文七七二七点、邦文二三八五点、補遺一二二点、合計一〇二三四点にのぼる大冊。ただページ削減のため、邦文図書の英訳は割愛、索引は総合索引と邦訳書著者別一覧のみとなっている。私家版のため少数数のみの発行。残部僅少。購入は直接薬師会員へお申込みください。

「未踏の南極ドームを探る・内陸雪原の13カ月」  
上田 豊著 成山堂書店  
B6判 二三八ページ  
定価二二二〇円



著者のことばを紹介しよう。「わたしは学生の頃、ヒマラヤの未踏峰と南極の未踏地に

あこがれていた。幸いにもヒマラヤは学部生、南極は大学院生の時に早々と実現した。ヒマラヤの体験は、梅棹忠夫先生の指導を得て学生隊員四人の共著として出版できた。のち大学院生のときにもヒマラヤで初登頂し、前回書いた経験を生かして、わたし個人の記録を出すことができた。登頂の六年後のことだった。四〇歳を過ぎて再び南極越冬の機会を得たわたしは、ヒマラヤでしたように、越冬の体験を本にまとめたかった。しかし短期に凝縮したヒマラヤ登山にくらべ、長期の単調な生活を描くのは難しい。この越冬に、記録として世に出す意味があるのかも、見通しは立たなかった。徒労に終わるうとも、ともかく晴海出港の日から日記を克明に残すように努めた。当初にはなかった魅力ある計画も、出港後に加わっていった。そうして、一三カ月を越えた内陸雪原での行動は、充実感とともに終わった。だが執筆する時間を得たのは、帰国して二〇余年を経た定年退職の後だった。その間、書く意思を保ち続けられたのは、それだけ大切な記録だったからだ。ようやく刊行できたが、読者はこの本に、何を見つけてくれるだろうか。

北村泰一氏は本書に次のような推薦文をよせている(抄録)。「著者上田豊氏のこの越冬記録は、近年の四半世紀をかけたドームふじ掘削計画の先駆をなすものである。ドームふじ掘削計画とは、そのドーム基地から、真下の岩盤めがけて、三〇〇mを越す氷柱を掘削し、過去何十万年の昔からの地球の大気温度を復元しようとする壮大な計画である。これ

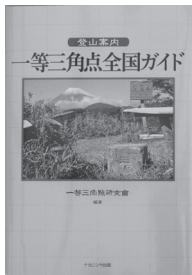
は、南極大陸の水の中には、その過去の気温の情報が含まれていることを利用して、その過去の気温を知ろうとする研究である。まず内陸基地の「みずほ基地」が創られた。そこは昭和基地から三〇〇km、高さ二二〇〇mのところ、ドームふじ高原へのゆるい傾斜面の真つ只中である。そこでの越冬記録の価値は今でも変わっていない。むしろ、南極大陸上での日本の初めての越冬記録といえる。上田氏はそこから雪上車で、「ドーム」の探索に出た。高原への傾斜面を登りつめ、辛苦のうち高原の最高地域をみつけ、掘削地点の発見というおおきな課題を解決した。上田氏のこの越冬記録は、日本南極観測隊のはじめての南極らしい低温の中の越冬記録だといえる。

### 「登山案内・一等三角点全国ガイド」

一等三角点研究會編著 ナカニシヤ出版

A5判 二六〇ページ

定価二一〇〇円



本書は全国四七

都道府県の標高

五〇〇m以上の一

等三角点を探訪す

際のガイドブック

である。今西錦

司氏は、三角点は競技のゴールに張られたテープと同じで、これにふれて初めて達成感を感じると著書に書いておられる。今西氏は山にただ登るだけでなく意義付けをして、さらにそれを楽しむ人であった。そこで氏が日

本山岳会の会長に就任されたとき、一等三角点の山を研究する会を作ること提案された。すぐに今西氏を顧問として研究会が結成されたが、活動に紆余曲折があり、平成一九年に本部を京都に置き、日本山岳会京都支部の大槻雅弘氏を会長に再編された。現在会員は一五〇人を越えて全国に広がっている。本書はこれら会員の实地踏査による集大成である。

北海道から沖縄県まで各県ごとに標高の高い順にすべての三角点が会員撮影の標石の写真とともに掲載されている。本文には、点名(国土地理院の「点の記」記載の名)、山名、標高、基準点コード、選点・埋設法、地図、経緯度、所在地、三角点道(最寄の主としてJRの駅を出発点にして、会員が実際に辿った道を紹介)が記載されている。難度の高いコースには三ランクに分けた表示がある。また本文のページの各所には「三角点の基礎知識」や「三角点こぼれ話」など知って楽しいコラムも挿入されている。

山好きのバイブル的ガイドブックとして必備の本である。

## 会員動向

## 編集後記

まづはともあれ、編集子の怠慢から本誌の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。早くに原稿をいただいた方にはまことに申わけありません。時宜を失うことなく発表する責任を常に自覚すべきと深く反省しております。

巻頭の松林公蔵会長の記事にありますように、われわれAACKの長年にわたる地道な活動が「京大・ブータン友好プログラム」を誕生させた。当会の面目躍如というところ。次号六〇号は続けて発行すべくすでに編集を開始しております。そこで六月発行予定の次々号(六一号)の原稿を募集します。原稿締切は四月二〇日です。

発行日 二〇一二年二月末日

発行者 京都大学土山岳会 会長 松林公蔵

発行所 〒六〇六-八五-一

京都市左京区吉田本町(総合研究二号館四階)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

研究科 竹田晋也 気付

編集人 前田 司

製作 京都市北区小山西花池町一―八

(株)土倉事務所